

景色

上久保篤

自分の影が美しく見えたのは、コンクリートの地面じゃなくなったから。整備のされていない地面を歩く行為が愛おしく思えてしまう放課後の雑談。私にとってのレッドカーペットは、目紛しく移り変わる世界の遠心力から解放された墮落的生活の一端であり、それを闊歩することが私の人生の最大の意義の様に思えてしまう。中心を覗けば厭世的台風の目が存在しているようで、私は酷く失望する。かつて自分はこんな空気の悪い場所にいたのかと、消し去りたい過去は置いてけぼりになっていたね。ようやく気付いた罪はしあわせを噛み締めることで救われる。関係性のニューロンを切る行為に鳥瞰できなくなったのは階段を降りたから。階段を降りた先は整備がされていないんです。オブジェクティブに世界切り取れなくて、これはうれしいことなんだけれどね、と一言。他人の不幸は私にとっての不幸であって、全然蜜の味なんかじゃない。眼前に裁縫針を突きつけられるような恐怖、感じてしまうのかつてすべてを失うことで生を証明する哲学者がいたらしい。そしてその行為に感動して実践する私がいたらしい。幽霊が怖いから心霊スポットに行くような行為です。背後から刺したいね。